

## 「方丈記」

2014年4月28日

3・11以降、鴨長明の『方丈記』がよく読まれていると聞く。時流なのであるうか、私も三木卓氏の『私の方丈記』を読んだ。『方丈記』には大火、地震、つなみ、疫病などに見舞われた「末法の世」が描かれ、天候異変の多い今の時代と似ていると言えよう。私にとっては、有名な冒頭の言葉が青春時代の心の出発点であった。「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたる例（ためし）なし。世の中にある、人と栖（すみか）と、またかくのごとし」。高校生の時、古文で出会った言葉である。青春の嵐に襲われ、生きることを狂おしく思っていた。「救い」などという言葉を知らず、ただ今を逃れたいと、寺を数か所、訪ねた。臨済宗の「安住寺」という寺に行き着いた。「玄海」という住職がおられ、町の知名士が集まって、増谷文雄『仏陀』の読書会をしていた。住職は、世は河の流れのように、とどまることのない無常である、無常という法の流れに身を委ねるところで、執着しない「覚者」になれると、禅宗らしい例えを用いて幾度となく、話された。しかし、私は「よどみに浮ぶうたかた」ではなく、苦しんでいる「私」であるという思いから抜け切れなかった。

住職は、ある時「君はキリスト教を知っているか」と問われた。今思うと、仏教の「覚者」になれない、キリスト教に行ってみろという奨めではではなかったかと思う。町にある教会を訪ね、初めて牧師という人に会った。蔵書の多さに驚いた。牧師は「キリスト教を知りたいのなら、聖書を読みなさい」と言って、聖書を貸してくれた。その冒頭の「初めに、神は天地を創造された」という言葉に驚いた。住職に、聖書は全能の神による天地創造とその支配を書いていますと言った。住職は涼しい顔をして「天地を創造した神を造ったのは誰ですか、大神ですか、その大神を造ったのは、大々神ですか」と言われた。私は、歴史観、時間論が違うと思った。仏教は、始めがなく終わりもない、そこでは時は循環する輪廻となる。聖書は、始めがあり終わりがあると説く。私は、聖書の時間論に立てば、どこに流されるか分からない「うたかた」ではなく、天地を創造した神に位置づけられた「私」として生きられると思った。それが『方丈記』からの脱却で、キリスト教入門であった。

三木氏は、中国からの引き揚げ者として、とどまらない激しい流転を体験し、世の無常を知った。『私の方丈記』と言って、鴨長明の無常観と自分の人生を重ね合わせて書いている。無常を知った者は、三木氏のように、地位や名誉から自由になる。本の帯には「人生の原点がここにある。混迷の時代に射す光」と書いている。富と力に執着する、この時代への強いメッセージが込められている。